

ブリンクリー編著『ジャパン』第9巻より

岡倉天心「一蝶^{いちちょう}の画 1652年～1724年」

‘A PAINTING BY ITCHO 1652-1724’

はなぶさ 英 一蝶^{み たてきん き}「見立琴棋書画図 風」

木版制作者

彫師：飯山良助

色摺：田村鉄之助

狩野探幽が徳川幕府の御用絵師として勢力を誇った江戸時代前期、これと異なる芸術を展開した画家として英 一蝶を挙げて略伝を掲載している。当時の風俗を軽妙で雅致ある描写と独創的な作風で描いた優れた画家として紹介している。また、一蝶と並ぶ同時代の画家として尾形光琳を挙げている。図版は一蝶の代表作として知られる六曲一双 風の左隻(対になっている左側)の一部。

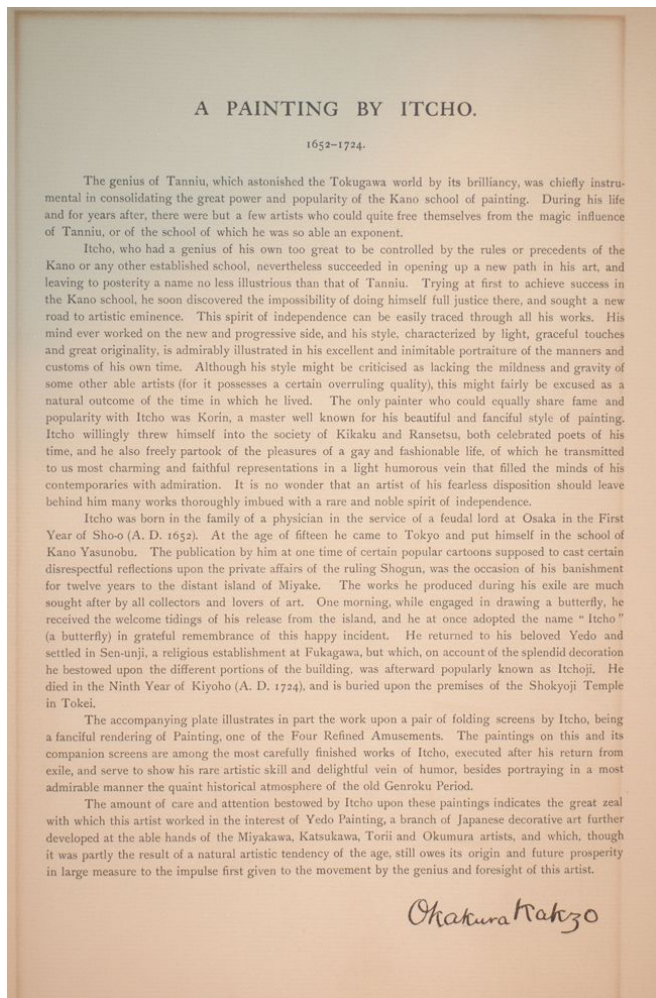
【本文の部分訳】



「図版は一蝶筆琴棋書画図 風一双の一部である。流罪赦免後のもので、一蝶としては極めて入念に仕上げた作である。彼の稀有な画技と快活なユーモア感を示し、また元禄時代特有の一種異様な雰囲気を抜群の技倆で活写している。

一蝶がこの図に傾けた細心な注意は、彼の江戸絵画の発展に注いだ並々ならぬ熱意を反

映している。この流れは日本の装飾的画風(1)の一態で、のちに宮川、勝川、鳥居、奥村(2)らのすぐれた作家により一層の進歩を見るのであるが、その発生と展開は、部分的には時代の自然な美術的傾向(3)の結果であるとはいえ、一蝶の才能と先見による始動に負うところが多いのである。」(金子重隆訳『岡倉天心全集(平凡社版)』第2巻より)



代の自然な美術的傾向(3)の結果であるとはいえ、一蝶の才能と先見による始動に負うところが多いのである。」(金子重隆訳『岡倉天心全集(平凡社版)』第2巻より)

(1)濃彩による華麗な大和絵、俵屋宗達や尾形光琳といった琳派などのことを指すと考えられる。

(2)江戸中期の浮世絵の各流派の祖、宮川長春、勝川春章、鳥居清信、奥村政信を指す。

(3)17世紀末から18世紀にかけて、新興の町人を担い手として奢侈な嗜好を反映した元禄文化のこと。

【原作品について】

英 一蝶「見立琴棋書画図屏風」

江戸時代 18世紀

紙本・金雲彩色 屏風六曲一双

各 158.2 × 367.4 cm

英 一蝶(1652～1724)は、はじめ狩野安信に師事し狩野派を習得するがこれに飽きたらず、岩佐又兵衛や菱川師宣もろのぶに学んだ風俗画や機知の冴えた戯画的表現を展開した。大名や旗本との遊興がもとで元禄11年(1698)に三宅島に配流されたが、宝永6年(1709)赦免により江戸に戻った。

この作品は大河内子爵家(江戸時代には松平を名乗った大名家)に伝来したものである。中国で高士(徳の高い人物)の余技として尊ばれた琴、棋(碁)、書、画の4つの芸を描く伝統的な主題に基づいている。一蝶はこれを日本の公家風俗に見立てて描いており、絵馬を見る子供たちの様子には江戸風俗や戯画を得意とした一蝶の特徴を見ることができ。一方、様々な流派を学んだ一蝶にしては狩野派の濃彩大和絵の画風に回帰した表現を見せている。